阿仏尼の賀茂社信仰

――俊成・為家の賀茂社百首との比較に見る――

福留瑞美

はじめに

本稿で取り上げる賀茂社とは、京都市北区上賀茂にある「賀茂別雷神社」いわゆる上賀茂神社と、左京区下鴨にある「賀茂御祖神社」いわゆる下鴨神社の二社の総称である。上賀茂神社では賀茂別雷神を、下鴨神社ではその母の玉依姫命と祖父の賀茂建角身命を祀り、両社は伊勢神宮に次ぐ正一位で、鎮守社として広く信仰されてきた。

このように信仰されてきた賀茂社であるが、奉納和歌の表現を通して具体的にどのように信仰されていたのかを探るべく、本稿では以下の百首を取り上げる。

①『俊成五社百首』所収の賀茂御社百首で、俊成七七歳の文治六年（一一九〇）三月一日に清書された百首。

②『為家七社百首』所収の賀茂社百首で、為家六三歳の文応元年（一二六〇）九月から翌年一月一八日の間に詠まれた百首。

③『阿仏五百首和歌』所収の新賀茂社百首で、弘安四年（一二八一）三月六日に亀ヶ谷の新賀茂社へ奉納された百首。[1]

この①②は京の本社への奉納和歌であり、③は亀ヶ谷（鎌倉）にある新賀茂社に奉納された百首であるが、新賀茂社は本社から鎌倉に勧請された神社であるので、同じ神への奉納和歌として比較対象としても問題ないと考える。

一、奉納百首について

初期の奉納百首では、相模の「走湯の百首」のように部立百首の形態で詠まれていたが、俊成は当時組題の典型とされていた堀河百首題を奉納和歌に採用する。その『俊成五社百首』の成立については、「八年越しの大事業であった千載集の撰集を終えた釈阿俊成は、まもなく日吉・春日両社への歌合奉納を思い立つが、詠作を依頼した歌人達の協力が得られず、やがて自歌百首の奉納に企画を変え、更に対象を五社に発展させる。」（松野陽一『藤原俊成の研究』[2]）というものであり、また、松野陽一氏は「千載集完成の謝意、生涯の総決算の意をも込め、且つ家門再興の悲願を秘めた新たな出発をも決意した詠作だったように考えられる」（同上）と指摘されている。

建保年間（一二一三～一九）以後の百首歌全体について、深津睦夫氏が「堀河百首題は必ずしも一般的ではなくなる」（「組題の世界――新古今以後を中心に――」[3]）と指摘されている。奉納百首の世界でも堀河百首題による百題百首だけではなく、慈円の『賀茂百首』[4]のような部立百首など様々な形態が存在する。したがって、必ずしも奉納和歌を堀河百首題で詠む形式は典型的とは言えなかったが、文応元年成立の『為家七社百首』では、祖父俊成の前例にならい堀河百首題を採用し、伊勢・賀茂・春日・日吉・住吉の五社に奉納する予定であったものに石清水・北野の二社を加え、七社百首となったものである。この『七社百首』について、佐藤恒雄氏は「（続古今集の）撰者拝命が直接の機縁」とし、反御子左派の真観の「盛んな将軍への接近の動きとまさに時期を同じくして詠まれていることは、注目しなければならない[5]」と指摘されている。

次に弘安三～四年に成立した『阿仏五百首和歌』は、俊成・為家の奉納百首の形式を踏襲したものであり、荘園をめぐって二条家と冷泉家との間で起きた訴訟を契機として詠まれたものである。この訴訟は都では決着を見ず、阿仏尼は六十歳前後という年齢にもかかわらず、弘安二年十月に幕府に訴えるため単身鎌倉へ下向することになり、そこで詠まれたのが『五百首和歌』である。

その後の奉納百首の流れについては、深津睦夫氏が「為兼の鹿百首や国冬の祈雨百首が、俊成の五社百首などの伝統につながる[6]」と指摘されている。俊成→為家→阿仏尼という流れが、後の京極為兼や津守国冬に「堀河百首題による奉納和歌」という形式を選択させるきっかけになったと考えられる。

以上のように、俊成が企画した堀河百首題という奉納百首の

形式は、息子定家には確認できないが、孫の為家から阿仏尼へと踏襲されていき、いずれも歌道家の存続に関わる事件という契機に詠まれたものである。

俊成・為家・阿仏尼の三者による奉納百首の共通点としては、①堀河百首題による百題百首の題詠歌という形式であること、②奉納先に関係のある歌枕（地名）及び祭事を詠み入れていること、③神祇歌・説話などを摂取していること、④祈願内容（窮状や願事など）を詠み入れていることなどが挙げられる。

これらの百首は、奉納和歌であるものの、堀河百首題という決められた設定で詠まれているため、作者自身の現実から切り離れた世界、つまり作者の生活から離れた次元で、詠まれたものである。そこで、本稿では、堀河百首題による一つの小世界の中で、賀茂社への信仰心をどのように表現したかという点において、三者の百首を比較することで、それぞれの特徴を明らかにしたいと考えている。

二、賀茂社に関連する表現の区分

俊成・為家・阿仏尼の三者による賀茂社奉納百首の和歌の中から、賀茂社にゆかりのある表現を抜き出して大別してみると、次の通りになる。

(1) 歌枕　…①賀茂社（上賀茂・下鴨）、②賀茂川、③摂社・末社・分社、④賀茂斎院
(2) 神域　…①神・神代、②神社・聖域、③神田
(3) 祭事　…①賀茂祭・臨時祭、②社の年中行事、③神官
(4) 摂取　…①神祇歌、②賀茂社に関係する歌
(5) 祈願　…①願事、②窮状、③祝意

以上の(1)・(3)は、賀茂社対象の奉納和歌の特徴を示している表現、つまり一首の中に奉納先が特定できる表現が詠まれているものである。(2)は、和歌の中に「神垣」「瑞垣」「しめ」のような神社・神域を示す表現はあるが、奉納先が特定できる表現は詠まれていないもの。しかし奉納百首という一連の作品という点からも、奉納先の寺社を対象として詠んでいると考えられる。(4)は、勅撰集の部立てにもあるような神祇歌や賀茂社に関する古歌などを摂取しているものを示している。(5)には、願事はもちろん窮状を訴える和歌も結局は救済されることを願って詠まれていると考えられるので、祈願内容に含めている。

それでは以上の分類を使って、各百首はどこに重点を置いて詠まれたものなのか、具体的に確認したいと思う。

三、歌枕・祭事における表現の比較

この章では、先の(1)〜(3)の区分に基づいて、俊成・為家・阿仏尼の三者が具体的に使用している和歌表現を確認するため、以下の【表1】〜【表3】にて例示する。

まず【表1】には、賀茂社に関する歌枕や神域を示す具体的な表現を三者別に挙げた。【表2】には、賀茂社に関係のある祭事について三者別に具体例を示した。【表3】は、それらを数値化し使用頻度を比較したものである。

これらの比較から言える特徴としては、①俊成の百首では本社だけではなく摂社や斎院など幅広く詠み入れていること、②為家の百首では賀茂社に関する歌枕や神域・祭事の表現を多く詠んでいること、③阿仏尼の百首では上賀茂・下鴨社を区別せず、賀茂川・斎院に関する表現もなく、賀茂社に関する歌枕や神域・祭事を表す表現が極端に少ないこと、などが見て取れる。

それでは、最初に為家の和歌を、具体的に見ていくことにする。まずは、地名「紫野」を詠んだものに、

1　消えやらぬ紫野ゆきしめ野ゆきそれかとまがふ春の夕暮れ（為家・残雪・三八）

2　花の色の紫野なるつぼすみれ草のゆかりにたれか摘むらん（為家・菫・一〇八）

がある。1の歌は、「茜さす紫野ゆき標野行き野守はみずや君が袖ふる」（万葉集・二〇・額田王）に拠るもので、「雪」と「行き」が掛けられている。額田王の紫野については鎌倉時代以降の『五代集歌枕』『夫木抄』『歌枕名寄』などの注記に近江国説と山城国説の両説が挙げられているが、山城国の紫野といえば賀茂の斎院の野宮が洛北紫野雲林院のあたりにあったと言われ、賀茂社ゆかりの地であり、為家の和歌は額田王の和歌の舞台であった紫野を山城国と考えていた証拠とも言えよう。

【表1】歌枕・神域の例示（　）内は、堀河百首題

	俊成	為家	阿仏尼
賀茂社	賀茂（霞） 賀茂の社（神楽・祝） 御手洗川（苗代・六月祓・霜・述懐）	賀茂の社（子日）、賀茂（若） 御手洗川（立春・藤・款冬・蛍・六月祓・菊）	賀茂の社（水鳥） 御手洗川（河）
上賀茂	その神山（桜・露） 神山（篭） 松崎（氷室）	賀茂山（霞） 都の北の賀茂の神山（山） その神山（立春・帰雁・懐旧・祝） 神垣山（九月尽） 楢の下水楢小川（泉）	賀茂山（郭公）
下鴨	糺の森（呼子鳥・千鳥） 御祖の社（盧橘） 御祖の神（懐旧）	糺の森（月・水鳥・述懐）	

賀茂川		賀茂の川上（立春） 賀茂川（月・暁・河）	賀茂の川上（擣衣・雪） 賀茂川（柳・苗代・初秋・霧） 鴨の羽川（河） 川岸の堤賀茂川堤防（薄）
摂社	片岡社	片岡山（残雪）	「楢の葉分けの陰」（竹）
	大田社	大田の沢（杜若）	
	松尾社	松尾（松）	
末社	貴船社	貴船川河社（五月雨） 貴船川（氷）、御手洗川（蛍）	貴船川（蓑）
	半木社		流木の森（早蕨・五月雨）
分社	新賀茂（鎌倉）		神の住む向かひの岡（子日） 向かひの岡も賀茂の瑞垣（山）
斎院		紫の野辺・かへさの道（蓮） 有栖川斎の宮（虫）	紫野（残雪・蓮）
神			神（蓮・炭竈・炉火・河・関） 天つ日影（氷）
神代			思ふ事なす神の坐す世（卯花） 神の始めし国（祝）
神域	瑞垣（菊） 御垣（竹）		神の衣（更衣） 神垣（蛍・鹿・紅葉・山家） 神垣や清き川原（千鳥） 朱の玉垣（虫） 神祀る（卯花） 神に手向けて（網代）
神田	御戸代（苗代） 大荒木の浮田（早苗）		御標引く御戸代（苗代） 御戸代の小田（早苗）

【表2】祭事の例示　（　）内は、堀河百首題

	俊成	為家	阿仏尼
賀茂祭	御阿礼（葵） 御標引き卯月の忌みをさす日（初恋） 帰さの道（蓮）	葵を急ぐ宮人（三月尽） 木綿掛け添へて神祀る（卯花） 御阿礼（葵） 葵草かざす頃（郭公）	御阿礼の葵草（葵）
御戸開き	垣や五月の今日の御戸開き（菖蒲）		
競馬		駒さへ牽き競ぶ（菖蒲）	
臨時祭		藤波を再びかざす（藤） 歌人のかざし（款冬） 再びかざす賀茂の藤波（苔）	

【表3】歌枕・祭事の使用頻度（延べ数）

	俊成	為家	阿仏
賀茂社	7	8	2
上賀茂	4	8	1
下鴨	4	3	0
賀茂川	4	8	0
摂社・末社・分社	6	4	3

	俊成	為家	阿仏
斎院	2	2	0
神・神域	2	9	11
神田	2	2	1
神事	6	15	4
合計	39	59	22

3　今しもぞ御手洗川の藤波を再びかざすかげは忘れぬ（為家・藤・一二二）

4　歌人のかざしや折りてとどめけん御手洗川の山吹の花（為家・款冬・一二九）

5　おしなべて葵を急ぐ宮人も春の暮れをばなほや惜しまむ（為家・三月尽・一三六）

6　花染の袖のなごりは惜しめども神の衣に夏は来にけり（為家・更衣・一四三）

7　卯月きて咲くてふ花の頃とてやゆふかけそへて神祀るらん（為家・卯花・一五〇）

8　今日祀るみあれにあへる葵草神よかけたるかざしなるらし（為家・葵・一五七）

9　ほととぎすをのが初音も葵草かざす頃とぞかけて待たる（為家・郭公・一六四）

10　五月来て賀茂の社の菖蒲草けふは駒さへ引き比らぶなり（為家・菖蒲・一七一）

11　かへりたつ雲井の庭火深き夜に霜冴えまさる山藍の袖（為家・神楽・四五八）

12　面影の苔の袖にもかかるかな再びかざす賀茂の藤波（為家・苔・五九一）

この3「藤波を再びかざす」、4「歌人のかざし」、12「再びかざす賀茂の藤波」については、十一月の酉の日に行われる賀茂の臨時祭の陪従が山吹のかざしを付け、神楽進行の指揮者である人長と、賀茂の祭の使いが、藤の造花のかざしを付けることになっていた。このように3・4・9・12の和歌では、祭のために頭髪や冠に挿した「かざし」としての藤・山吹・葵が詠まれており、5の和歌では祭の準備を急ぐ神官の姿、10・11の和歌では根合・競馬・神楽という行事など、賀茂の祭や賀茂の臨時祭の様子が詠まれている。

13　たまぼこのゆききの袖の白妙に色香もまがふ春の梅がえ（為家・梅・四五）

14　川岸のつつみになびく花すすきゆききの袖にまがへてぞ見る（為家・薄・二七六）

15　白妙のゆききの袖も見えわかずあくるあさけの賀茂の川霧（為家・霧・三二五）

とあるように「ゆききの袖」は、祭や参詣のために賀茂社への道を行き来する人の様子を詠んだものと考えられる。また、繁雑を避けるため例示しないが、【表】に示した例以外にも、為家の百首には「深山（霧）」「川辺（若菜）」「川風（霜）」「波よするみぎは（寒鹿）」「早瀬川（氷）」などの表現もある。奉納先にこだわっ

て詠んでいる為家であるので、単に山や川という表現であっても賀茂山や賀茂川を想定して詠んでいると思われる。

以上のように、為家の百首では、堀河百首題の四季部の特徴を活かして「社頭の四季」や「賀茂社の年中行事」を表現することに主眼が置かれていたと言える。

一方、賀茂社に関する歌枕や祭事の表現が極端に少なかった阿仏尼の百首を見てみると、賀茂社に関する表現を詠んだものに、

16　山風に氷とけゆく貴船川岩波早く春立ちにけり（阿仏・立春・207）

17　神のます向かひのをかの小松原引かねど今日の子の日をぞ知る（阿仏・子日・208）

18　忘られず昔みあれの葵草たのみし神にかけて思へば（阿仏・葵・229）

19　賀茂山の峰より出づるほとゝぎす嬉しと思ふ初音聞かせよ（阿仏・郭公・230）

20　憂きながら沈み果てじと水鳥の賀茂の社に身を祈るかな（阿仏・水鳥・270）

21　都より外もの山に見し物を向かひのをかも賀茂の瑞垣（阿仏・山・292）

がある。16「貴船川」は貴船神社に縁のある川であるが、平安中期頃から上賀茂神社の末社として考えられていたということからも、賀茂社ゆかりの地と言える。この貴船に関しては、俊成や為家も賀茂社百首に詠み入れている。

17・21の「向かひのをか」については、新賀茂社百首の序に「かめがやのやどのむかひの新賀茂のやしろ」とあることから、鎌倉滞在中の阿仏尼の住居（亀ヶ谷の宿）から対面の岡にある新賀茂社を詠んだものである。この二首は、阿仏尼の百首が本社の賀茂社ではなく新賀茂社への奉納和歌として編まれたものであるという特徴を示すものである。したがって、阿仏尼の百首が俊成や為家のものと比べ、本社の賀茂社に関する表現も自ずと少なくなった理由の一つとも考えられる。

では、阿仏尼は本社を意識していなかったかというと、そうではなく、例えば21では、「都にいたときには都の外の山に見えていたものが今現在は目前の岡に賀茂社が見えている」として、阿仏尼にとって都と密接な関係である本社は必然的に都を思い出させるものであり、そして都を思い出すとき自身が鎌倉滞在の身であることを実感せざるを得ないのである。そこには望郷や懐旧の念が込められており、このような認識は阿仏尼の新賀茂社百首全体に見られる。新賀茂社百首の中には、「都」九例

（鶯・桜・帰雁・月・菊・山・橋・旅・別）、「故郷」四例（蓮・蛍・露・虫）、「もと来し方」一例（春駒）、「こし路」一例（帰雁）、「我が思ふ方」一例（海路）、「東」四例（鶯・菊・雪・旅）、「東路」一例（野）、また鎌倉の地を表す「向かひの岡」二例（子日・山）の他に「泉谷（いずみのやつ）」一例（泉）が詠まれている。都と東の対比や望郷・懐旧については、ほぼ同時期に詠まれた『阿仏五百首和歌』所収の「新日吉社百首」と比べても新賀茂社百首の方が多い。これは本社の賀茂社が都と密接な関係で都を想起するという地理的要因もあるのではないだろうか。正確には新日吉社百首は、新賀茂社百首が奉納されてから五日後に詠み始められたものであり、亀ヶ谷の新日吉社は比叡山の麓に鎮座する日吉大社から勧請された神社である。したがって日吉大社も都に近い存在とは言えるが、よりいっそう祭などで都と緊密な関係である賀茂社に対して、阿仏尼は望郷や懐旧念を詠むことが多くなったと思われるのである。

四、和歌摂取における比較

賀茂社に関連する本歌取りについて具体例を見ていくことにする。まず、俊成の百首に、

22　我が玉もあくがれぬべし夏虫の御手洗川にすだく夕暮（俊成・蛍・一三〇）

23　君が代は賀茂のやしろのひめこ松とかへり花も咲かんとすらん（俊成・祝・二〇〇）

とある。22は『後拾遺集』神祇の「もの思へば沢の蛍を我が身よりあくがれにけるたまかとぞみる」（一一六二・和泉式部）、「奥山にたぎりておつるたきつせにたま散るばかりものな思ひそ」（一一六三・貴船神）に拠る表現であり、つまり上賀茂神社の末社（貴船神社）に関する和歌を摂取したものである。23は「ちはやぶる賀茂のやしろのひめこ松よろづ世ふとも色はかはらじ」（古今集・東歌・一一〇〇・藤原敏行）に拠るものである。

為家の百首に、

24　貴船川蛍乱れしたきつせにたまちるばかり降る霰かな（為家・霰・四〇九）

とある歌は、先の俊成にも取られていた和泉式部と貴船神との贈答歌に拠るものである。

以上のように、俊成や為家に共通して摂取された歌もあるが、阿仏尼には賀茂社に関する和歌の摂取は確認できない。このように阿仏尼がこだわりを見せないのも、これも新賀茂社百首が本社の賀茂社ではなく新賀茂社への奉納和歌であったからなのかもしれない。

五、祈願内容の比較

この章では祈願内容の具体例を見てみていくことにする。そこで、次に挙げる【表4】では願事・窮状・祝意・思慕という内容を詠んだ和歌を、各百首ごとにそれぞれ数値化したものである。

この祈願内容の比較から言える特徴としては、①俊成の百首では神を思慕する表現に偏っているということ、②阿仏尼の百首では願事や窮状を訴える内容の和歌が圧倒的に多いということである。

それではまず、先の①に当てはまる俊成の和歌を具体的に挙げると、

25　立ちかへり昔の春の恋しきは霞を分けし賀茂の明ぼの（俊成・霞・一〇三）

【表4】祈願内容の大別（延べ数）

	俊成	為家	阿仏
願事	14	18	38
窮状	15	13	30
祝意	8	6	1
思慕	8	2	0
合計	45	39	69

26　忘られずその神山の花ざかりよもすがら見し春のよの月（俊成・桜・一一〇）

27　紫の野辺のしばふのつぼすみれかへさの道もむつまじきかな（俊成・菫菜・一一六）

28　瑞垣や五月のけふの御戸開きかざる菖蒲の香さへなつかし（俊成・菖蒲・一二五）

29　いにしへをしのぶ心をそふるかな御祖の杜に匂ふたち花（俊成・廬橘・一二九）

30　わが玉もあくがれぬべし夏虫の御手洗川にすだく夕暮（俊成・蛍・一三〇）

31　秋の夜もしばふの露をふみ分けて猶その神の恋ひしかるらん（俊成・露・一四六）

32　行きかへりなれし都のしのばれて音もなつかし賀茂の河波（俊成・川・一八七）

という和歌がある。波線部「賀茂」「その神山」「紫野」などの賀茂社に関する歌語に対して、二重線部「恋しき」「むつまし」「なつかし」など、対象に強く心ひかれたり興を感じたりする、賀茂の神への親近感を表す語を詠んでいる。俊成は、いつでも賀茂社ゆかりの地や事物を思い出したり恋しく思ったり、神を思慕する心情を示すことで、賀茂の神に信心深さを伝えたかっ

たのではないだろうか。為家や阿仏尼の百首と比べて、俊成の百首では神を寿ぎ賛辞することに主点が置かれていたと考えられる。

一方、先の②に指摘したとおり、阿仏尼の百首の特徴は俊成や為家よりも圧倒的に願事や窮状を訴える和歌の多いという点にある。阿仏尼自身や家族が置かれている窮状を訴えたり、祈願したりする点に主眼が置かれていたと言える。それでは、阿仏尼は実際にどのようなことを祈願しているのか、具体的に見ていこうと思う。

六、阿仏尼の祈願内容

まずは鎌倉滞在の理由にもなった、歌道家に対する思いが詠まれた和歌として、

33　刈萱の折れ伏す道を通さばやみだりがはしな大和言の葉（阿仏・247・刈萱）

34　書きをきて教へし跡をたがへじと東の雪を踏みゝつるかな（阿仏・266・雪）

35　冬とてもなをよも枯れじ葦原やなかつ国なるよゝの言の葉（阿仏・267・寒蘆）

36　浜千鳥鳴きても知れよ文置きし跡を思ふはさこそ悲しき（阿仏・268・千鳥）

37　和歌の浦にとめしかたみと残りけり蘆辺にすだつ鶴の子どもは（阿仏・291・鶴）

38　伝へこし道たがはずは逢坂を人はせくとも神や許さん（阿仏・295・関）

がある。33・35では、古くからの歌道であるので、たとえ「みだりがはし」い状態や、植物が枯れる「冬」の状態であっても、正しい道に戻したいという気持ちが窺える。乱れてしまった御子左家の状態を憂い（36）、歌道家に残された我が子のため（37）、夫為家の譲り状の通りに訴訟の旅に出て鎌倉までやって来た（34）ということ、そしてたとえ邪魔が入ろうとも正統なる歌道家を継ぐ者として神は見てくれている（38）という心情が読みとれる。また、阿仏尼は我が子に対する思いとして、37のように歌道家の継承者として見ていただけではなく、この百首には他にも、

39　おひたゝん行く末遠く祈るかな竹の子の世を思ひ捨てねば（阿仏・289・竹）

40　思ひやる我がふるさとの夕闇は蛍ばかりや一人なるらん（阿仏・236・蛍）

41　旅寝する草の枕に比べても思ひこそやれふるさとの露（阿仏・252・露）

42　ふるさとの主となしてふり捨てし鈴虫いかにつゆけかるらん（阿仏・258・虫）

という和歌がある。『十六夜日記』では息子為相のことを「侍従為相の君」と記し、その為相への返歌に「秋深き草の枕に我ぞなくふりすててこし鈴虫のねを」と和歌を詠んでいるが、42と同趣向によるものと思われる。また『和歌初学抄』や『八雲御抄』（巻三・異名部）に「侍従　すずむし」とあり、鈴虫は侍従の異称として挙げられていることからも、これらの「鈴虫」は侍従である為相を指しているということになる。

このように、阿仏尼は息子為相の将来を案じ（39）、また今回の訴訟の旅で離ればなれになって都（故郷）で寂しく悲しんでいるのではないか（40～42）という母親の思いやりが見て取れる。そして神に対して、そんなにも子どもたちが悲しんでいるため何とかしてほしいという祈願している。このような子を案じる和歌を詠む一方で、

43　いつよりも猶咲きまされ山桜宮このつとにゆきて語らん（阿仏・216・桜）

44　さすが又もとこし方に帰りけりしばしぞあるゝ野辺の春駒（阿仏・218・春駒）

45　この春はいづれ先にと急ぐらん我は宮こに雁はこしぢに（阿仏・219・帰雁）

46　ふるさとは菫茂りて荒れぬともわれ摘みはやしゆきてこそ見め（阿仏・222・菫菜）

47　なぐさむる月さへつらくなりにけりせめて宮この空を恋ふとて（阿仏・256・月）

48　又なしとみやこの人の植へて見しきくもあづまにうつろひにけり（阿仏・259・菊）

49　いつの日かみやこの空をそれとみて渡り帰らん瀬田の長橋（阿仏・296・橋）

50　海とをく船こぎかねしあま人もわが思ふ方や近づきぬらん（阿仏・297・海路）

51　かくばかり宮こを恋ひぬ旅ならばあづまもしばしなぐさみやせん（阿仏・298・旅）

52　ほどふれど猶こひしさのまさるかな別れていでし月の宮こは（阿仏・299・別）

とあるように、故郷を思慕し帰京の思いにあふれている。そして自身が置かれている現実を振り返るとき、

53　片敷きの袖はこほれど春風に散りすぎにける梅がゝぞす

る（阿仏・213・梅）

54　人遠くなりぬる身には旅にても山かたつきていほりをぞかる（阿仏・300・山家）

55　わが心隔てぬものをいかなれば人はよそなる秋霧の空（阿仏・253・霧）

と、鎌倉の地で一人でいるという孤独感や、帰京を妨げる障壁の存在を感じたり、

56　いかゞせむ憂きに忘れておのづからなぐさむ花の春も暮れなば（阿仏・226・暮春）

57　木の葉ちる冬のしぐれとなりにけり秋を年々送る涙は（阿仏・263・時雨）

58　いかゞせんいづち急げと網代もるひをいたづらに送る苦しさ（阿仏・271・網代）

59　年もよし暮れなばくれね嘆きつる旅の宿をも春は立つやと（阿仏・276・歳暮）

60　ねては又こよひむなしく明け方にはやくなりゆく鐘の音かな（阿仏・287・暁）

61　見しあとの苔いかばかり茂るらん年のみとせは露もはらはず（阿仏・290・苔）

62　心から常なしとこそ水無瀬川ゆくせの水のたえぬ命を（阿仏・304・無常）

とあるように、訴訟が長引くため帰京できず無駄に時間経過していくことに、焦燥や悲嘆、苦痛を感じている。その他にも、

63　をのづから思ひのきばのひまもなし昔しのぶの露の深さは（阿仏・302・懐旧）

64　よをかさね思ひねにねて見つる哉むかしの人のありし姿を（阿仏・303・夢）

とあるように、在りし日の夫を思い出しては涙したり、

65　ぬれてほす涙のひまもなき物をさのみやくもる春雨の空（阿仏・217・春雨）

66　ねなゝきそしのぶぞかしやさを鹿にまさりて思ふ秋の心も（阿仏・251・鹿）

67　身を嘆くわれならねどもさと人も衣うつとていはねざりけり（阿仏・257・擣衣）

68　わが袖にぬれはまさらじ露わけて朝だちしける狩りの衣も（阿仏・273・鹿狩）

と、日々悲嘆にくれたりするという窮状を訴えている。以上のように窮状のみを訴える一方で、救済を求める和歌も相当数存在する。

69　すみわびてかこひすてゝし杜若さかゆる宿の春に咲かな

ん（阿仏・223・杜若）

70 さのみたゞ世をうの花と嘆かじよ思ふ事なす神のます世に（阿仏・228・卯花）

71 みごもりは苦しかりつる菖蒲草底あらはれていつか引かれん（阿仏・231・菖蒲）

72 袖ぬれてとるや早苗も小山田に雲なす稲の秋をこそ待て（阿仏・232・早苗）

73 朽ち果てぬ宿のゝきばゝつゐに又世にたちばなの春を待つらし（阿仏・233・橘）

74 山川の濁りなき世にかへりてはみしぶをすゝぐ五月雨の頃（阿仏・235・五月雨）

75 神やしる花もなべての花ならで濁る水にもしまぬはちすを（阿仏・238・蓮）

76 しばしこそ風騒ぐなれ花すゝき思ひをきけるつゆもたがふな（阿仏・245・薄）

77 つゐにさてとけざらめやは涙せく袖の氷もあまつ日かげに（阿仏・269・氷）

78 うきながら沈みはてじと水鳥の賀茂のやしろに身を祈るかな（阿仏・270・水鳥）

79 けふまでは消えかへるとも神にこそかきおこされめ下の埋み火（阿仏・275・炉火）

80 年もよし暮れなば暮れね嘆きつる旅の宿をも春は立つやと（阿仏・276・歳暮）

81 立ちかへる末まどはすなあづまぢのわけこしのべは草深くとも（阿仏・294・野）

82 うごかじな神のはじめしくになればあだ波かけて風騒ぐとも（阿仏・306・祝）

とある和歌では、傍線部のように鬱屈した状態から救い出されることや、障壁のある状態であってもいずれは物事が順調に進むことを願っている。ここでは、訴訟にまでなってしまった相続問題や二条家の存在に対して、鬱屈した思いや障壁としての存在という意識が見て取れるのである。また、神に対して祈願する和歌に、

83 神がきにいのりかけてし藤なれば春の末まで色やまさらん（阿仏・224・藤）

84 忘られず昔みあれのあふひ草頼みし神にかけて思へば（阿仏・229・葵）

85 賀茂山の峰よりいづるほとゝぎす嬉しと思ふ初音聞かせよ（阿仏・230・郭公）

86 頼むぞよ神のみまへにうたふなる朝倉かへし返す返すも

87　空にみつ神は知るらん炭竈の煙ひまなくくゆる思ひは（阿仏・274・炭竈）

88　はては又御手洗川になりぬべし神をかこちてながす涙は（阿仏・293・河）

89　人しれず保つ御法の深きえに神もくもらぬかげやどすらし（阿仏・305・述懐）

とある。ここでは我が子藤原氏の繁栄（83）や、勝訴という「嬉しと思ふ初音」（85）を望んだり、何度も賀茂社に祈願する自身の姿（84・86・88）を詠んだりしている。

90　を山だのしめかけそめしわがかたになはしろ水や心ひくらむ（阿仏・221・苗代）

91　さこそわれはぎのふるえの秋ならめもとのこゝろを人のとへかし（阿仏・244・萩）

92　たちのぼれきりのうへなる女郎花くもゐの庭の秋の庭まで（阿仏・246・女郎花）

93　くちなしにいはぬおもひもあらはれてひらけにけりな山ぶきの花（阿仏・225・款冬）

94　夏ごろもいまはひとへにうれしさやそでにも身にもなをあまるまで（阿仏・227・更衣）

とあるように、自分の思い通りになるように願っている和歌もある。これは勝訴や家の栄華などを望むものと考えられる。

以上ように、阿仏尼の百首では、自身や家族が置かれている窮状を訴えたり、勝訴祈願したりする点に主眼が置かれていたと言えるのである。

最後に

奉納和歌を堀河百首題の百題百首という組題で詠むということは、初学の百首として慣れ親しんでいた時代において、俊成の『述懐百首』のように不安や苦悩、辛さや儚さを述べるのには適していたのであろう。こうして俊成から始まり為家・阿仏尼という堀河百首題による奉納百首の系譜の中で、本稿では賀茂社奉納百首に限って比較検討してきた。

①俊成の賀茂社百首では、奉納先である賀茂社ゆかりの地や事物に対して思慕する気持ちを表すことで、賀茂社に対する信仰心を示していた。②為家の百首では、賀茂社の年中行事を堀河百首題に即して表現し、神や祭事を寿ぐことで賀茂社への信仰心を示している。③阿仏尼の新賀茂社百首では、俊成や為家ほどに奉納先を意識しているとは言えないが、都を想起させる

ものとして賀茂社を捉えているようである。滞在先の鎌倉からの視点（旅人としての視点）で百首は詠まれており、窮状を訴えたり願事を述べたり心情を述べることに主眼が置かれ、述懐百首としての性格が強く表れている。

このように、堀河百首題による一つの小世界の中で、それぞれの特徴が表れていると思われる。また、為家は俊成の前例を継ぐ意志を序文に記しているが、賀茂社に限って言えば、堀河百首題での奉納百首の形式は踏襲したものの、主題や表現内容までは踏襲していなかったと言える。また、思慕する対象が俊成の場合は神であり、阿仏尼の場合は家族のいる都であったという点においても、表現方法までは踏襲されていない。したがって、俊成・為家・阿仏尼と受け継いでいった「堀河百首題による奉納百首」という枠組みに、御子左家を継ぐ者という意味合いが、いっそう込められていったと思われるのである。

〔注〕

（1）以下の引用本文については、阿仏尼の新賀茂社百首は冷泉家時雨亭文庫本により、それ以外は新編国歌大観によっている。また和歌引用部分には便宜上、私に漢字を当てている。

（2）笠間書院・昭和四八年刊。

（3）『論集〈題〉の和歌の空間』（笠間書院・平成四年）所収。

（4）承久期に詠まれたという慈円の「賀茂社百」は、春20・夏15・秋20・冬15・雑30首からなる部立百首になっている。

（5）『藤原為家研究』（笠間書院・平成二〇年）。

（6）（3）と同じ。

（ふくどめ　たまみ／本学大学院生）